小諸市誌　近・現代篇　目　次

発刊のことば……小諸市長　小林俊弘
監修にあたり……信州大学名誉教授　理学博士　小林寛義
例　言

第一編　政治・行政

第一章　政　治……5

第一節　明治維新と小諸……5
一　維新の動乱と小諸……5
和宮の御下向　水戸浪士の通過　赤報隊と小諸藩　戊辰戦争と小諸藩　小諸騒動　百姓一揆と小諸藩
二　版籍奉還と廃藩置県……10
版籍奉還と藩治職制　廃藩置県と小諸県
第二節　地方自治の近代化……12
一　行政機構の変革と小諸……12
戸籍区と壬申戸籍　大区・小区制と長野県統一　郡区町村編成法と連合戸長役場　小諸町会の開設
二　自由民権運動の成立……23
政治運動と小諸　秩父事件と大同団結
第三節　地方自治体制の確立……28
一　市制・町村制の施行……28
町村制と小諸　町村議会と小諸
二　郡制の開設と廃止……34
郡制と郡役所　郡会の開設
三　長野県政の歩み……37
三新法時代の長野県　府県制と長野県　長野県会と県参事会
第四節　国政への参加と社会運動……40

一　帝国議会の開設……40
大日本帝国憲法発布　帝国議会の開設
二　普通選挙運動の展開……44
普通選挙期成同盟会の成立　普通選挙法の公布
三　社会問題の発生と展開……47
小作争議と農民運動　社会問題の発生　製糸工女と労働
四　水平社運動の展開……52
四民平等と解放令　信濃同仁会と融和運動
水平社と部落解放運動　昭和初期の解放運動
第五節　昭和恐慌と戦時体制下の小諸……57
一　昭和恐慌とその影響……57
恐慌と生活　町行財政の停滞　救済事業の開始　経済更生運動の展開
二　第二次世界大戦と小諸の戦時体制……62
政党政治の行き詰まり　国民精神総動員運動
大政翼賛政治の確立　御牧ヶ原修練農場と満蒙開拓団　青少年義勇軍への入隊　統制経済下の小諸　町村の戦時体制
第六節　第二次世界大戦後の新しい社会……73
一　敗戦と町村政治の改革……73
小諸市域町村の敗戦処理　初の首長公選と民主政治
二　行政機関の設置と改変……75
小諸に設置された行政機関　教育制度の改革
三　敗戦後の人々の暮らし……78
食糧問題と配給の状況　女性の社会参加　浅間山演習地反対運動
第七節　小諸市の誕生と発展……82
一　小諸市の誕生……82
合併の背景と経過　乗瀬・西小諸の編入
二　小諸市政の展開……87
市政機構の整備　市長・市会議員ほかの選挙
市庁舎の建設　市民憲章と市木・市花の制定
小諸市の市政総合計画　同和行政の推進
第八節　歴代市町村長・議会議長名簿……98
一　市町村長（町村制施行後）……98
二　議会議長（第二次世界大戦後）……101
第二章　財　政……103
第一節　税　制……103

一　明治初期の税制と地租改正……103
物納から金納へ　壬申地券の交付　地押丈量と地価の算定　地租改正の結果
二　小諸藩の秩禄処分と士族授産……108
秩禄処分　士族授産
三　税制の整備とその変遷……114
税制の整備　町村制施行後の税制　大正・昭和初期の町村税　昭和恐慌期の町村税　戦時中の町村税　戦後の町村税　市制施行後の市税　中心市街地の地価の変動
第二節　財　政……127
一　明治期の財政……127
明治初期の財政　三新法期の町村財政　町村制施行後の町村財政
二　大正・昭和終戦までの財政……134
大正・昭和初年の町村財政　昭和恐慌期の町村財政　戦時中の町村財政
三　戦後の財政……139
四　市制施行後の財政……140
第三章　治　安……145
第一節　警　察……145
一　警察制度の創始と組織の進展……145
新制度の創始と邏卒屯所の発足　警察制度の整備と変化　小諸警察署設置と警廃事件　第二次世界大戦下の警察　民主的警察制度への進展
二　警察活動の現状……152
現行警察組織と活動の現状　民間団体との提携
三　治安の状況……153
第二節　消　防……154
一　消防組織の進展……154
消防組の創始と組織の改編　第二次世界大戦下の警防団　自治体消防から広域消防組織へ
二　消防活動の現状……160
第三節　登　記　所……162
一　登記所の設立・変遷……162
不動産等登記制度の創始と推移　業務の現状
第四節　交通安全……165
一　交通をとりまく諸問題……165
交通の発達と事故の拡大
二　交通安全活動の展開……167

交通安全協会の設立とその活動　交通安全運動と市民の取りくみ

第四章　兵　事……170

第一節　兵役制度の変化と戦争……170

一　徴兵令から国民皆兵へ……170

徴兵令と徴兵検査　徴兵令の改正と国民皆兵制

二　戦争と人々の生活……174

日清・日露戦争　第一次世界大戦とシベリア出兵　日中戦争から第二次世界大戦へ

三　戦時体制下の諸団体……188

第二節　戦没者と慰霊……191

一　救済制度の創始と変遷……191

二　町・村葬……192

三　忠魂碑・慰霊碑の建立……195

四　遺族会とその活動……195

戦没者名簿……197

第五章　災害と治山・治水……221

第一節　明治以後の災害記録……221

一　風水害・旱害・地滑り・浅間山噴火・火災など記録年表（明治～平成）……221

浅間山噴火災害　集中豪雨による災害　富士見平・押出の地盤変動災害

第二節　防災対策の変遷と現状……228

一　防災事業の推移……228

二　防災指針と防災組織の現状……229

三　浅間山火山対策……230

第二編　人　口

第一章　明治初期の新しい戸籍制度……235

宗門人別帳から壬申戸籍へ

第二章　人口の推移……237

第一節　市制施行前の人口現象……237

一　旧町村別の人口と世帯数……237

女子人口が多かった糸都小諸　世帯数が増加傾向の三岡村　大戦で人口が急増した南大井村　大戦で二〇〇世帯も増えた北大井村　大戦後も人口が増える大里村　家族が一・五人も減った川辺村　女子人口の方が多い小諸市域

二　旧町村別の年齢別人口と産業別人口……245

生産年齢人口の男子が少ない六町村　老年人口の割合が大きい三岡村　大里村・川辺村は全体の九〇パーセントが農家　製造業人口が急増した小諸町

第二節　市制施行後の人口現象……250

一　人口と世帯数……250

市制施行後増えつづける世帯数

二　年齢別人口……252

生産年齢人口は全人口の六四パーセント　年齢構成は健全型から不健全型へ

三　産業別就業人口……254

産業就業者は二・三次産業へ　商業就業者が卓越する相生区　旧村部の産業別就業者

四　市街地およびその周辺の人口増減……262

人口のドーナツ化現象

第三章　人口変動の状況……265

第一節　市制施行前の人口変動の状況……265

一　出生率と死亡率……265

出生率が低い小諸町　死亡率も低い小諸町

第二節　市制施行後の人口変動の状況……267

一　出生率と死亡率……267

減少傾向の出生率　変わらない死亡率

二　婚姻率と離婚率……270

婚姻率　離婚率

三　転出入による人口の増減……271

移動が多い男子人口　増加する国外との転出入

第四章　最近の人口現象の特色……275

一　ふえる核家族……275

小諸市は二・九人家族へ　核家族化が激しい南大井と北大井

二　すすむ高齢化……277

高齢化がすすむ大里・川辺地区

三　進行する少子化……279

女子一人が生む子どもは一・七人

四　ふえる外国人……280
いちじるしくふえる外国人

第三編　集　落

第一章　集落の成立……285
第一節　近世までに形成された集落……285
北国街道沿いに形成された小諸　古い平原と開発された御影新田　歴史が古い清水の駅や菱野牧　山間の集落と街道沿いの芝生田
第二章　集落の形態と機能……288
第一節　集落の形態・機能……288
北国街道の宿駅と城下町　鉄道開通などで生まれた商業集落　農業が盛んな北大井・大里地区　開拓集落の変貌　新興住宅団地　変化が少ない農業集落
第二節　地域共同体の変化……299
共同体の結びつきが残る柏木上区　共同体的意識が薄れた相生町　伝統的商店街が変化した本町
第三章　相生町通り商店街の現状……305
第一節　相生町通り商店街の概要……305
第二節　相生町通り商店街の現況……307
一　調査方法と平成十二年の商店街……307
二　業種構成と土地の垂直的利用……310
三　開業年と土地所有・居住関係……313
四　顧客の範囲・特性……314

第四編　産業・経済

第一章　農　林　業……323
第一節　農業の現状……323
一　稲作農業の現状……323
小諸市の農業と稲作
二　畑作農業の現状……328

主な農作物と分布
第二節　明治前期の農業の姿……331
一　農業中心の社会……331
明治前期の小諸の農業
二　水稲に依存する農業……332
暮らしを支えた稲作
三　養蚕の普及……335
明治前期の小諸の養蚕
第三節　近世の農法からの脱却……336
一　勧業政策の始まりと共同苗代の普及……336
勧業政策の始まり
二　桑園の増加と収繭量の増大……338
夏秋蚕の飼育による養蚕の隆盛
三　キャベツとモモ……341
高原野菜発祥の地　三岡村のモモ栽培
第四節　昭和恐慌下の農業……343
一　繭価の暴落から再び稲作へ……343
品種改良と化学肥料
二　養蚕業の衰退……345
農業経営の転換
三　たくあん漬・アスパラガス・リンゴ……347
四　豚・山羊・にわとり・兎などの中小家畜……348
第五節　第二次世界大戦後の農業……349
一　農地改革と農業技術の進歩……349
新しい農村への出発
二　高原野菜の発展と御牧ケ原のばれいしょ・薬用人参・家畜……351
浅間山麓の高原野菜　御牧ケ原の白いも　御牧ケ原の薬用人参　三岡村の洋菜　家畜の現状
三　戦後海外からの引揚者・戦災者による開拓……356
高原の開拓　平地林の開拓
第六節　稲作から畑作中心へ……358
一　米の生産調整はじまる……358
きびしい減反
二　高原野菜と果樹栽培の現状……359
レタス栽培の急増　戦後の果樹栽培
三　土地基盤整備の進行……362
小諸における土地基盤整備

四　大型広域農協への歩み……365
第七節　林　業……366
一　浅間火山南麓における林野の特性……366
カラマツ人工林中心の浅間山麓
二　明治初期の国有林地の確定……367
国有林へ編入された入会地
三　国有林地の払い下げ……369
訴訟で取り戻した民有地
四　カラマツの造林……370
早かった佐久のカラマツ造林
五　小諸市の現状……372
小諸市の林野は三四〇〇ヘクタール余
六　山林の利用……374
大きく変わった国産木材の需要　土壌侵食を防ぎ水源を守る森林　上信越高原国立公園の観光資源
第二章　工　業……381
第一節　工業の推移と現状……381
一　工業の推移……381
二　工業の現状……383
第二節　近代工業の芽生え……387
一　器械製糸の成立と伝統工業……387
丸万製糸　純水館　製糸業の展開　醸造業その他
二　製糸業と伝統工業の盛衰……395
純水館の発展　伝統工業　電気事業
三　世界恐慌と戦時体制下の工業……405
製糸業　産業統制　軍需工場への転換　疎開工場
第三節　第二次世界大戦後の工業の軌跡……409
一　戦後の復興……409
平和産業への転換　賠償指定　撤退する疎開工場　企業協同組合の設立　朝鮮戦争と工業地場産業の復活　工場誘致の動き
二　経済成長期の中で……416
工業化への道　低開発地域の工業振興　工業集積
第三章　商業・サービス業……427
第一節　近代移行期の商業……427

一　明治・大正期の商業……427
伝統的卸売商業地　雇用形態の特徴と変化
同族商店による商業経営　低迷する商業　製
糸業の隆盛と商業の復興　商業団体の設立と活
動　産業組合の設立と商業
二　昭和恐慌・統制経済下の商業……441
昭和恐慌と商業への影響　企業整備と転廃業
第二節　第二次世界大戦後の商業……446
一　戦後復興期の商業……446
商業の自由化　商工会議所の活動
二　大型店の進出……449
アカカンバン百貨店の開店　大型店の増加とそ
の影響
三　高度経済成長期以降の商業……453
商業の近代化と商店街の変貌　自家用車の普及
と商店街　小諸商業の現状と課題
第三節　サービス業……460
一　明治期のサービス業……460
二　サービス業の多様化……463
三　第二次世界大戦後のサービス業……464
第四節　商圏の変化……467
一　鉄道開通と商圏の変化……467
明治前期の商圏　信越線の全通と商圏の変化
佐久鉄道の開通と商圏の変化
二　第二次世界大戦後の商圏の変化……471
第四章　金　融……476
第一節　近代金融機関の草創……476
一　銀行・銀行類似会社の設立……476
明治初期の動き　小諸における銀行のはじまり
二　明治期の在来金融……481
無尽や頼母子講　商家の金融活動　地主の金
融活動
三　銀行の変遷……484
銀行経営の変化　塩川倉庫・塩川銀行
四　郵便局の活動……486
郵便局と貯金業務　為替業務の特色
第二節　産業革命期における金融機関の成長……488
一　銀行の発展……488
小諸銀行の経営展開　六十三銀行小諸支店の開

設　志賀銀行小諸支店の開設
二　産業組合の成立と発展……493
小諸における産業組合　八満信用組合の活動
三　製糸金融……497
製糸金融の特色　産業組合への製糸金融　銀行家の製糸業進出
第三節　昭和恐慌と銀行合同……501
一　銀行合同……501
昭和初期の銀行合同　信濃銀行の破綻
二　産業組合・諸会社の活動……505
産業組合の拡大と統合　昭和恐慌の影響
三　戦時統制経済と金融機関……508
銀行への統制　産業組合と経済統制　終戦直後の金融統制
第四節　第二次世界大戦後の復興・高度成長期の金融……510
一　戦後の市内金融機関……510
高度成長期までの市内金融機関　低成長期の市内金融機関の動き　農協の成立と信用事業
二　金融における行政の役割……515
行政による制度金融の整備　小諸における制度金融の諸相
三　新しいかたちの金融……517

第五編　交通・通信

第一章　新しい交通機関の発足……523
第一節　明治維新後の陸運……523
一　明治維新後の小諸宿……523
二　陸運会社の発足と運営……524
三　小諸中牛馬会社の設立と影響……525
四　陸運会社と中牛馬会社の提携……528
第二節　明治初期の道路と諸車の導入……530
一　道路と橋の状況……530
二　人馬による運送から荷車へ……533
三　人力車と馬車の登場……534
四　小諸駅組合の制定と運営……536

第三節　信越線の敷設と小諸……537
一　中山道鉄道の計画……537
二　直江津線の建設と小諸駅の開設……538
三　小諸駅の開業と小諸の変貌……539

第二章　近代交通の発達……542
第一節　信越本線の改良……542
一　輸送量の増大と小諸駅……542
二　小諸駅の拡張と平原信号所の設置……543
三　信越本線の改良と生活……544
第二節　佐久鉄道と布引鉄道の開通……546
一　佐久鉄道の開通と小諸……546
二　布引鉄道の開通と廃止……549
第三節　自動車の出現と交通の変化……552
一　乗合自動車の登場と路線の拡大……552
二　自転車・オートバイ・タクシーなどの普及……555
三　自動車の普及と道路の改修……556
四　運送業の変化と倉庫業……558

第三章　戦時体制下における交通の変化……560
第一節　鉄道の統合と軍事優先の輸送へ……560
一　佐久鉄道の国有化と小海線の全通……560
二　戦争の激化と信越線・小海線の運行……561
第二節　自動車輸送の統合とガソリン不足……563
一　千曲自動車と通運会社の統合……563
二　交通機関の衰退と人々の生活……565

第四章　第二次世界大戦後の交通の発展……566
第一節　交通機関の復活と近代化……566
一　鉄道やバスの復活と小諸駅前の近代化……566
二　平原駅の設置と信越本線の電化……568
三　小海線のジーゼル化と急行列車の運行……570
四　国鉄バスの運行……570
五　バスの全盛時代からマイカー時代へ……572
第二節　高速交通時代と小諸……576

一　上信越自動車道の建設と小諸インターチェンジの開設……576
二　小諸市と周辺の道路建設……578
三　北陸新幹線の開通とその影響……581
第五章　通信の近代化と発展……584
第一節　新しい通信制度の成立……584
一　小諸郵便役所の発足……584
二　電信の開始……587
三　郵便業務の拡大とスピード化……588
四　電話の開始と社会の変化……590
第二節　通信の近代化と小諸……592
一　郵便のスピード化と大衆化……592
二　有線放送の開始と役割り……595
三　電話の自動化と普及……596
四　NTTの発足と高度情報化時代へ……599

第六編　観　光

第一章　第二次世界大戦前の観光……605
第一節　小諸懐古園の建設……605
一　小諸城跡から懐古園へ……605
二　懐古園の設計……607
三　藤村碑の建設と観光施設の充実……609
第二節　浅間山の観光と小諸……611
一　浅間山登山……611
二　浅間山麓や車坂峠の観光地化……614
第三節　菱野鉱泉と布引観音……615
一　菱野薬師と菱野鉱泉……615
二　布引観音と附近の観光……617
第二章　第二次世界大戦後の観光……619

第一節　浅間山と高峰高原……619
一　上信越国立公園と浅間登山……619
二　高峰高原の観光……623
三　浅間山麓の林間学校と民宿……625
第二節　歴史と文学の街小諸……628
一　懐古園と周辺の施設の充実……628
二　藤村文学と中棚温泉……630
第三節　小諸市観光の特色と課題……631
一　小諸を訪れる観光客……631
二　小諸市観光の課題……634

第七編　教　育

第一章　学校教育……641
第一節　近代学校教育の草創——明治初期——……641
一　公立学校の創設……641
学制発布と学区制度　学校設立への動き　各集落の学校創立　教育費負担と校舎や設備
二　教育内容と就学状況……650
学習内容　就学状況
三　教員養成と教育会……654
教員とその養成　教育会の発足
第二節　近代学校教育の展開——明治中・後期——……657
一　尋常小学校の設立……657
尋常小学校の発足　高等小学校の設置と普及
教育勅語と御真影の奉戴　学校行事の充実
学校経費と施設・設備
二　中等教育の萌芽……664
小諸義塾の創立と終焉　小諸商工学校の開校
第三節　近代学校教育の発展と変貌——大正・昭和初期——……667
一　初等教育の発展……667
義務教育年限の延長　教育革新の動き　昭和恐慌下の初等教育
二　勤労青少年教育の草創とその変遷……670
実業補習学校と青年訓練所　子守学級と工女特別学級

三　中等教育の拡充……673
商工学校の郡・県立移管　小諸実科高等女学校の創立
第四節　皇国民の育成――第二次世界大戦下――……674
一　国民学校の発足……674
戦時教育の強化　国民学校の発足　戦争の激化と集団疎開　敗戦後の国民学校
二　戦時下の勤労青少年教育……678
青年学校の発足と終焉
三　戦時体制下の中等教育……679
小諸商業学校と小諸高等女学校　商業夜間学校と長野県小諸中学
第五節　学校教育の民主化と学制改革――第二次世界大戦後――……682
一　教育基本法と学校教育法の公布……682
新学制の実施　教育委員会の発足　PTAの結成と活動
二　六・三制教育の進展……684
小・中学校の発足と変遷　教育課程と教科書　教育費の推移　障害児教育と小諸養護学校　同和教育の推進　学校給食の開始と変化　教員数・児童生徒数などの変遷
三　新制高等学校の成立と変遷……693
小諸実業高等学校の変遷　小諸高等学校の変遷
四　幼稚園と各種学校……697
幼稚園　各種学校
五　教職員組合の発足とその動向……699
第六節　学校教育――現状と課題――……700
一　小・中学校……700
今後の課題
二　県立学校……703
小諸商業高等学校　小諸高等学校　小諸養護学校
第七節　小諸市内小・中・高等学校沿革表……707
一　小学校……707
二　中学校……710
三　高等学校……710
第八節　歴代教育委員長・教育長名簿……711
第二章　社会教育……713
第一節　社会教育の草創……713

一　青年会の結成と活動……713
若者連の活動　青年の夜学会　青年会の活動
小諸図書館の設立
二　女子青年団・婦人会・少年団の結成と活動……717
女子青年の活動　小諸婦人会の創立と活動
少年団の結成
三　社会教化運動……720
禁酒・廃娼運動　報徳社の結成と活動
第二節　戦時体制下の社会教育……722
一　広報活動……722
広報紙の発行
二　戦時下の少年団・青年団・婦人会などの活動……724
連合少年団の結成と活動　青年団の組織と活動
国防婦人会の活動
第三節　第二次世界大戦後の社会教育……727
一　戦後の社会情勢と青年団活動……727
青年団の再結成と活動
二　社会教育の中核施設としての公民館……728
公民館活動の胎動　ナトコ巡回映画鑑賞会
盛んな成人学級・学校
三　市の広報活動……731
公民館報の発行　広報こもろの発行　地元紙の発行
四　小諸市の人権同和教育……734
市民の学習会　公民館における実践　企業内における取組み
第四節　平成期の社会教育……736
一　社会教育から生涯学習へ……736
二　小諸市の生涯学習……737
生涯学習の市民意識調査　生涯学習推進の取り組み　生涯学習の町づくり　生涯学習の現況
三　生涯学習施設および団体と活動……742

第八編　文化・体育

第一章　文　芸……753
第一節　城下町を彩る文人たち……753
第二節　江戸文学を底流とした明治初期の文人たち……755

第三節　近代文学への覚醒期の文人たち
——明治後期——……756
一　詩人島崎藤村と「落梅集」……756
二　「破戒」の誕生と小説家島崎藤村……757
三　小諸の文学的風土と島崎藤村……761
四　若山牧水を迎えた小諸の若い文人たち……762
第四節　小諸の文学の素地固めに尽力した文人たち——大正・昭和中期——……763
一　太田水穂と「潮音」などに連なる歌人たち……763
二　臼田亜浪と小諸の俳人たち……767
三　白秋に私淑した龍野咲人……771
第五節　疎開した文学者と戦後の状況
——昭和中期以後——……774
一　高浜虚子と小諸の俳人たち……774
二　「高原」と山室静……778
第六節　その他の文芸……779
一　歌謡と川柳その他……779
二　藤村に師事した塚原健二郎……780
三　小諸文芸の民話・伝説……781
四　文学サークルや公民館活動……782
五　藤村文学賞と全国俳句大会……782
六　小諸を訪れた文人たち……783
付表　小諸の文学碑……784
第二章　美術・工芸……789
第一節　明治・大正期の美術・工芸……789
一　文人画家　依田文甫……789
二　書家　小林寛民……790
三　木彫家　清水芳仙……791
第二節　小諸義塾にまつわる美術家……792
一　三宅克巳と丸山晩霞……792
二　三宅・丸山の画風を継ぐ市井の画家……793
三　書家　木俣曲水……794
第三節　近代美術を推進した人々……795
一　洋画家　小山敬三……795
二　水彩画家　小山周次……796

三　彫刻家　小林貞吾と内堀功……797
四　郷土に根ざした一途な画家たち……800
第四節　疎開した美術家の影響……802
一　日本画家　伊東深水……802
二　日本画家　白鳥映雪……803
三　奥村土牛と尾沼菱僊……804
第五節　第二次世界大戦後の美術・工芸の動向……805
一　美術教育に尽くした人々……805
二　公民館活動と美術愛好グループの誕生……807
三　郷土の美術家の作品の保存と展示……807
四　うすれゆく伝統工芸と陶芸の普及……809
第三章　芸　能……810
第一節　邦楽・洋楽・その他諸芸の変遷……810
一　邦楽の移り変わり……810
明治・大正期の邦楽　大正・昭和期の民謡
戦後の芸能活動
二　洋楽の移り変わり……820
明治期の西洋音楽　大正・昭和期の歌曲
三　その他の諸芸……824
第四章　娯　楽……827
第一節　映画・演劇の変遷……827
一　映画の普及……827
映画の移り変わり　映画・演劇の常設館
二　演劇の移り変わり……830
明治・大正期の演劇　戦後の素人演劇
第二節　ラジオ・テレビの普及……832
一　ラジオ……832
ラジオの普及　放送番組の変遷
二　テレビ……834
テレビの普及　小諸有線テレビの開局
第五章　文化財……836
第一節　小諸市文化財の保護……836
一　小諸市文化財保護条例……836
小諸市文化財保護条例　小諸市の文化財
第二節　文化財保護法制定以前の文化財……840

一　国指定の文化財……840
天然記念物　国史跡　国宝
第三節　文化財保護法制定以後の文化財……842
一　文化財保護法による国指定の文化財……842
重要文化財
二　長野県文化財保護条例による県指定の文化財……845
県宝　県史跡　重要無形民俗文化財　天然記念物
三　小諸市文化財保護条令による小諸市指定の文化財……850
重要文化財　史跡　古墳　無形文化財　天然記念物
第六章　体育……871
第一節　学校教育からの発展……871
一　明治期から大正期の体育……871
学校教育からの広がり　遠足・運動会の普及
二　昭和初期から第二次世界大戦終結までの体育……874
第二節　近代スポーツの復興と隆盛……874
一　第二次世界大戦後の復興……874
国土復興への担い手として　体育関係団体の結成と活動
二　国民体育大会への参加と開催……877
国民体育大会への参加　レスリング競技会の開催
三　体育指導委員の活動・軽スポーツ・体育施設……879
体育指導委員の任務と活動　軽スポーツの普及推進　体育施設の設置状況

第九編　宗教

第一章　神道国教化のなかでの宗教……885
第一節　明治維新後の宗教政策……885
一　神仏習合と神仏分離……885
神仏習合　神仏分離
第二節　神道国教化と仏教の動き……887
一　神道の国教化……887
神道の国教化　神道国教化の歩み
二　廃仏毀釈とその後の仏教……890

廃仏毀釈　廃寺廃堂　仏教復興の動き
三　その他の宗教の動き……894
キリスト教　天理教　創価教育学会
第二章　第二次世界大戦後の宗教……898
第一節　日本国憲法と宗教……898
一　信教の自由……898
日本国憲法と信教の自由
二　法人化した宗教団体……899
宗教法人法の成立　宗教法人の宗教団体　新宗教
第二節　宗教法人としての神社・寺院・その他の宗教……904
一　神　社……904
小諸の神社
二　寺　院……910
小諸の寺院
三　その他の宗教……915
天理教　キリスト教　創価学会

第十編　福祉・衛生・水道

第一章　保健衛生と医療……919
第一節　保健医療行政の沿革……919
一　西洋医学の普及……919
小諸藩と種痘　明治初期の医学
二　保健医療行政の近代化……921
明治・大正期の保健医療　昭和期以後の保健医療
第二節　公衆衛生の沿革……925
一　伝染病・成人病・母子衛生の対策……925
明治期の伝染病　昭和期の伝染病　成人病と母子衛生
第三節　環境衛生の沿革……931
一　上・下水道の普及……931
藩政時代の用水　上水道の普及　下水道の普及

二　公害対策・廃棄物処理……937
公害の発生と対策　廃棄物の処理
第四節　医療機関の変遷と現状……941
一　医師会・歯科医師会の歩み……941
医師会の経過　歯科医師会の経過
二　病院・診療所・開業医……945
小諸厚生総合病院　国立小諸療養所　医療法人小諸病院　美里診療所　小諸市内医院・病院一覧　小諸市内歯科医院一覧
第二章　社会福祉と社会保障……951
第一節　公的扶助制度の創始と変遷……951
一　明治から第二次世界大戦時までの公的扶助制度……951
二　第二次世界大戦後の公的扶助事業の進展……954
第二節　社会福祉・社会保障の現状……958
一　社会福祉対策事業……958
福祉対策の基本方針　福祉行政の組織　各種の社会福祉対策　市民のかかわり
二　社会保障事業……971
国民年金制度　国民健康保険制度　介護保険制度

三世紀にわたる小諸の変遷

第一章　明治から第二次世界大戦までの小諸……981
第一節　城下町の面影……981
第二節　県下の商都小諸……983
第三節　器械製糸の街へ……985
第二章　第二次世界大戦後の小諸の変容……988
第一節　昭和末年までの小諸……989
第二節　平成の小諸……993
一　商工業の停滞……994
二　道路網の整備……997
三　住宅団地の形成と大型店の進出……998
四　第二次産業都市から第三次産業都市へ……999

五　文学・観光都市へ……1000
第三章　明治以来の市街地の拡大……1005
小諸市　近・現代年表……1009
小諸市誌　近・現代篇　執筆者一覧……1091
小諸市誌　近・現代篇　編纂関係者名簿……1095
あとがき……1097

付図（別冊）

1　長野県北佐久郡小諸町全図（明治26年）
2　長野県北佐久郡小諸町全図（推定大正5～7年）
3　長野県北佐久郡小諸町制一覧（昭和8年）
4　小諸町要図（昭和27年）
5　小諸市航空写真集成図（平成10年）